

かんきつ収穫の時期を迎えた、昨年12月6、7日に、かんきつ収穫お手伝いツアーが行われ、島外から5人が参加しました。



かんきつ収穫は、参加者にとってほぼ初めての体験。2日間に渡り挑戦したのですが、収穫のスピードだけでなく、「ハサミの音からまったく違う」状態。手際の良さに圧倒されながら、お手伝いになったか不安なくらい。しかし、「6歳を超えてもパワフルに活動している島の皆さんは本当に素晴らしい方々

「ハサミの音からまったく違う」収穫お手伝い

ばかり、逆にパワーをもらいました」、「力仕事と高いところはお役に立てたのでは？来年も行きたい」と参加者の声。受け入れてくださった土森さんから「来年も来てほしい」との言葉をいただきました。ありがとうございます。



さぎしまのアルバムが完成

200以上の作品が集まり、インターネットと島内で投票を行った「島★彩発見！フォトコンテスト in さぎしま」。参加作品を集めたフォトブック「さぎしまのアルバム」がこのたび完成しました。島内外の各所に飾らせていただくとともに、各種イベント等の賞品もしくは景品で活用していく予定です。

実際にどこに飾ったかは、フォトコンテストのフェイスブックページ (<https://www.facebook.com/sagishima.photo>)にて随時発信しますので、そちらをご覧ください。



三原市もブースを持ち、市職員の有木浩さんと大和町地域おこし協力隊の唐井ゆかりさんが佐木島の移住案内や地域おこし協力隊の募集をPR。熱心に話に聞き入る来場者の姿が見られました。

日本最大級の移住・交流フェア

東京・有明で佐木島をPR

全国から200を超える自治体が参加し、日本最大級と言われる、JOIN移住・交流&地域おこしフェアが、1月18日に東京・有明の東京ビッグサイトで開催され、IターンやUターンで地域に暮らすことに関心を持つ人々が多数あつまりました(JOIN＝一般社団法人移住・交流推進機構、総務省主催)。

いかがでした？ クロスワードパズル

| | | | | | | | | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|----|---|
| 1 | タ | 2 | テ | 3 | オ | 4 | タ | 5 | イ | 6 | シ | |
| 7 | コ | 8 | ン | 9 | ヤ | 10 | イ | 11 | シ | 12 | ジ | |
| 13 | ニ | 14 | ク | 15 | ヘ | 16 | ン | 17 | ミ | | | |
| 18 | タ | 19 | イ | 20 | ハ | 21 | イ | | | | | |
| 22 | カ | 23 | タ | 24 | カ | 25 | ナ | 26 | ハ | | | |
| 27 | ハ | 28 | ル | 29 | カ | 30 | ゴ | 31 | ル | 32 | フ | |
| 33 | シ | | | 34 | ト | 35 | ウ | 36 | ノ | 37 | ミ | |
| | | | | | | | | | | | 38 | ネ |

答えは二ミナノ

ご応募ありがとうございます。当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

宮本常一と佐木島



(1)土性骨のすわった人たちが生きていた

『忘れられた日本人』などの著作で知られる、民俗学者の宮本常一(みやもと つねいち 1907-81年)は、日本全国をくまなく歩き、各地の民間伝承や人々の暮らしを克明に調査・記録し、「旅する巨人」とも言われます。

みずからも山口・周防大島に生まれ、民俗調査の中で離島に数多く足を運び、その知見に基づき、昭和28年(1953年)に成立した離島振興法の制定にも尽力しました。その活動と生き様は多くの人をひきつけ、未刊行の著述や講演録が今なお編集、出版されています。

生活、文化の理解に根ざした、宮本常一の島嶼開発や振興についての仕事と考えは、今で言う、島おこしやまちづくりのヒントになると思われまます。この稿では先ごろ出版された講演集などを参考に、宮本常一に学んでいきたいと思ひます。

ご存知の通り、宮本常一は、昭和25年12月に生涯で一度だけ、佐木島を訪れており、その記録は『私の日本地図6瀬戸内海口芸予の海』(2011年・未来社)等に残っています。

宮本常一は瀬戸田で漁業のことを調べ、古くからつづいている家のある佐木島に関心をもち、渡し船で向田野浦に渡ります。

「日照りがつづいて畑はカラカラにかわいており、女たちが池の水をタゴで畑へ運んでいた。わたしはその風景に胸を打たれた」。それが第一印象でした。

古文書を調べ、磨崖和霊石地蔵の碑文を写します。そして殺生禁断の由来に触れ、塩田とサツマイモ栽培を経て、はげ山と格闘し、努力している人々がいることを知るに至ります。

そして、この本のあとがきで、ただ一度おとすただけでも強く印象に残っている島のひとつとして、佐木島をあげ、こう記します。「そこには土性骨のすわったような人たちが、その風土の中に生きていた」。土性骨のすわったような人たちは、いったいどのような人たちなのでしょう。(つづく)